総長一行がメルボルン大学を再訪

北海道大学とオーストラリア・メルボルン大学は、半世紀前からの人獣共通感染症研究連携、近年のナノマテリアル連携を基盤に、令和3年末から戦略的国際パートナー校として全学的な研究連携強化を図ってきました。令和6年7月にメルボルン大学先住民担当理事一行が、同年9月に研究担当理事一行が北大を訪問したこと、本年2月に同学初めての女性学長となるエマ・ジョンストン学長が就任したことを踏まえ、4月29日（火・祝）・30日（水）に寳金清博総長、瀬戸口剛理事・副学長、田中伸哉医学研究院長、小出陽平農学研究院准教授、植村妙菜国際連携推進本部学術主任専門職の5名がメルボルン大学を訪問しました。

2回目となる今回の総長訪問では、ジョンストン学長以下、マイケル・ウェズリー理事（国際）、マーク・キャシディ理事（研究）、バリー・ジャッド理事（先住民）、エイドリアン・リトル副理事（国際）、ジャスティン・ゾベル副理事（大学院・国際研究）、アラスター・スローン副理事（研究連携）、イヴァン・マルジック副理事（研究インフラ）、ティリキ・オヌス副理事（先住民）らの歓待を受け、両校の関係性の強まりが感じられました。

29日（火・祝）にはメルボルン大学の農学・畜産キャンパスであるドゥーキーを訪問し、2,440ヘクタールの広大な農業試験場の管理と研究教育体制を学ぶ機会となりました。両校で作物育種、熱ストレス下での家畜生産研究が進んでいますが、ドゥーキー固有の4種類の土壌や機械化された農業体制は、今後の活用可能性がうかがえました。

30日（水）にはビクトリア州総合がんセンター、ロイヤルメルボルン病院、メルボルン・コネクトといった施設訪問のほか、両校連携を振り返るパートナーシップ・ショーケースが開催され、研究者・職員を含め50名弱が集まりました。寳金総長より連携への感謝と150周年式典への招待が述べられたほか、瀬戸口理事からは、全学コンフェレンス、毎年5件開催されている共同研究ワークショップ、博士課程デュアルディグリー、外部資金獲得、Hokkaidoサマー・インスティテュートとメルボルン大学グローバル・クラスルーム事業を通した研究教育の現状が紹介されました。キャシディ理事からは「ワークショップを起爆剤として進んできた連携は、4年目の今、ウクライナ研究等更に広がりを見せている」ことが示され、ウェズリー理事からも「研究インテグリティ的にも地政学的にも両校野連携には意味がある」ことが語られました。ジャッド理事からは「北大との先住民連携は、これまでカナダ、豪州に偏っていた先住民コミュニティ連携から、台湾と日本を含めたアジア地域の先住民コミュニティとの橋渡しになる。準備中の先住民学における国際修士課程でも、北大と協力していく」との意向が示されました。メルボルン大学からはアジア研究所の小川晃弘教授、医学・歯学・保健科学研究院のクァン・チャム准教授がそれぞれ「現代日本」、「異分野融合チームによる高齢者医療」の共同講義事例を紹介し、北大からは小出准教授が農学連携の状況を報告しました。

メルボルン大学工学・IT研究院と田中医学研究院長、理学研究院と小出准教授の研究打ち合わせも開催され、また研究執行部会談では「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」での連携についても話がおよび、研究インフラ担当執行部同士での共共拠点活用と自走化に向けた意見交換や技術職員の双方向研修について了承を得ました。メルボルン大学からは今夏再度の先住民担当理事一行の来訪が予定されています。

（国際連携推進本部）

ジョンストン学長（左）と寳金総長（右）

連携を振り返る瀬戸口理事

閉会挨拶を述べるキャシディ理事

一行とメルボルン執行部